
空へ

伊吹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空へ

【Nコード】

N8296D

【作者名】

伊吹

【あらすじ】

真っ青な空に一筋の黒煙が昇っていく。父が死んだというのに、私は泣いてすらいなかった。母は私に「お父さんの子で幸せだった？」と尋ねる。その答えは「イエス」でもあり「ノー」でもある。きつと幸せだったし、たぶん不幸だった。

前編

さんさんと降り注ぐ太陽の光が眩しくて、少し目を細める。何処からともなく聞こえてくる蝉の鳴き声が耳に響く。こめかみから顎へと汗が流れそうになり、私は上着のポケットから白いハンカチを取り出して顔を拭いた。黒いスーツは熱を吸収しつつ、しばらくこの熱地獄からは解放されそうにない。

夏だ。雲ひとつない青空が、より一層、騒がしい季節を盛りたてている。

父さんも最後まで、静かな季節で眠りにつけばよかったのに。最後の最後まで、父は父らしかった。父と真夏の季節は、何をするにも派手で騒わがしい所がそっくりだ。

真っ青な空へと一筋の黒煙が昇っていく。

火葬場の空気はどこか乾いているように思えた。喉の奥がカラカラと乾いて痛い。思わず眉をひそめてしまった。今のコンディションはこの上なく最悪だ。体の水分は汗として流れ出ていて、目頭まで運ぶ余裕はない。

そんな私の姿を、遠縁の女性たちが「可愛げのない娘だ」と評しているのが、蝉の声に紛れて聞こえてきた。

「葬式」という非日常に、昼ドラのような展開でも求めているのだろうか。残念ですね、おばさま方。ご期待に添えそうにありません。

彼女たちの昼ドラの名脇役になれなかった私は、主役にされているだろう母へと視線を向けた。

「母さん」

「……今日子、お父さんね、もうあんなに遠くまで行っちゃたの」
火葬場の細い煙突からのびている黒煙を、そのか細い指でさしていた。小さい頃は何よりも頼もしく思えた母の手も、気がつけばコレヨレなおばあちゃんの手になっている。

私が大人になったと同時に、母もまた老けた。

「そうだね」

私はどう返していいのか困り、無難に答えた。

ベンチに腰かけている母の隣に座り、横目で母の顔を見た。母は瞬きさえも忘れて、じっと空に昇っていく黒煙を、父の姿を見つめている。

その瞳に、涙の影は見当たらない。ただ、じっと、黒煙の行方を見守っている。

「母さん、父さんと結婚して幸せだった？」

ふいに、そんなことを聞きそうになってしまった。言葉は喉元まで出かかっていたが、心の奥底へと押しやる。その問いをして、母から返ってくるだろう言葉は、きつと否定の言葉だ。

私がみてきた限りで、母が父と一緒にになって幸せだったとは思えないからだ。

「……ねえ、今日子」

「何、母さん」

「お父さんの子どもで幸せだった？」

「え？」

「今日子は、お父さんの子どもで、幸せだった？」

何を聞かれているのかよくわからず聞き返すと、母はハッキリとした声で同じ問いを繰り返した。

上半身ごとこちらに向き直り、瞳の中には黒煙ではなく私の姿が映し出されている。さっきまでの呆けたような顔とも、普段の穏やかな顔とも似つかない顔をしていた。

眉は今にでも下がりそうだし、まっすぐ私を見つめる視線もどこか揺らいでいる。母は私の上着の裾を握って、「どうなの？」と続けた。

母さん、どうしてそんなに不安そうな目で私を見るの。

父の子どもで幸せだったのか。私の答えは「イエス」でもあるし、「ノー」でもある。きっと幸せだったし、たぶん不幸だった。

父と母の馴れ初めは、私にはわからない。10代で祖母の家を飛び出した父が、10年ぶり里帰りした時には、父の傍らには母がいたそうだった。

「ミヨさんは、シゲにはもったいないお嬢さんだあ」

私は小さい頃、祖母の家に預けられることがしばしばあった。そのたびに祖母は私を膝の上にのせて、そう言っていた。

「ねえ、ママとパパはあーっ？」

「大丈夫、大丈夫。今日子ちゃん、大丈夫よ」

父にも母にも会えないさみしさから、私はよく愚図って祖母を困らせたものだ。祖母は大丈夫と繰り返しながら、弱々しい腕で込め

られるだけの力で私を抱きしめてくれた。祖母の声はいつも震えていて、自分自身にも言い聞かせていたのかもしれない。

「またお天道様が昇ったら、ミヨさんもシゲもニッコリ笑って、今日子ちゃんを迎えにくるよ」

「ほんとー？」

「おばあちゃん、嘘ついたことないだろう？」

「うん、ないっ！」

祖母は私に嘘をついたことは1度としてなかった。

「今日子ーっ！迎えにきたぞーっ！」

「お義母さん、この度もご迷惑おかけしました」

祖母の言う通り、何日かすれば必ず父と母がニッコリと笑いながら私を迎えに来る。

そういうことが小学校卒業まで、おばあちゃんが亡くなるまで続いた私の日常だった。

父は普段、残業だ出張だと忙しくしていた。けれど、日曜日だけは必ず家にいた。その日の母はいつも以上にご機嫌で、私の大好物を作ってくれたり、時間制限されていたゲームを何時間しても怒らなかった。

「今日子、何して遊ぼうか」

「あのね、あのね、スーパーファミコン」

「ゲームもいいが、こんな天気の良い夏の日さ、外でパーツと遊ぼうぜ！」

「じゃあ、ラジコン走らせるーっ！」

「おっし、持ってこい！」

「はい」

日曜日だけは、父を1人占めできる魔法の日だった。木登りだつて、キャッチボールだつて近所の男の子に負けないほど上手かった。人形遊びやお絵かきといった女の子らしい遊びを好まなかったのは、父の影響が大きいと思う。今の趣味も、プラモ作りと男っぽい。

「今日子ちゃん、あなた、怪我しないようにね」

母はベランダから父と私に声をかけて手を振っていた。全力で遊んだあとの夕飯が生きてる間で1番幸せだと、私は大袈裟ながらそう信じていた。

私は父も母も大好きだった。

全力で私と遊んでくる父も、おいしいご飯を作って待っていてくれる母も、私は大好きで仕方なかった。

前編（後書き）

3話ほどで終わる予定です。

短編にするつもりが長々と……。お話を短くできるようになりたいです……。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

中編

私の親戚の女性たちは揃いも揃っておしゃべりだ。よくもまあ飽きないものだと思う。

大抵は噂話や人の陰口。彼女たちの夫や姑といった身内から、隣人や仕事先のお得意さんまで。彼女たちのターゲットは止まるところを知らないらしい。

彼女たちの1番の話のネタになった人物は、私の両親だろう。

「シゲさん、また浮気したんですってねえ」

「本当に毎回毎回、懲りない男ね」

「ミヨさん、浮気されても、最終的にはシゲさんのこと許しちゃうから」

「それが男を調子づかせるっていうのに、ミヨさんって馬鹿よね」

「私なんて1回でも浮気されたら耐えられないわ、即離婚よっ！」

「そうよね！ミヨさんの神経疑うわあ」

そんな井戸端会議を、こんな時に繰り広げるあなたたちの神経のほうに疑わしい。

祖母の三回忌、親戚が祖母の家。今では父の長兄夫妻が継いだ家に集まっていた。お坊さんもお寺へと帰り、法事がひと段落ついた時に始まった井戸端会議。偶々、裏で話し合っていたことを通りますぐりに、耳にしまったのだ。

井戸端会議を聞いた私の感想は、否定できないな、だった。

中学に上がったところから、日曜日すら父は家に寄りつかなくなった。最初のころは、出張だとか残業が原因だと、母は説明していた

が、1年もたてばそれすらも消えうせた。

このころになれば、私も物事を察することが出来る年ごろになっていて、祖母の家に預けられることが多かったのも、父が原因なんだろうと結論付けていた。私はなんともさめた子供へと成長した。

家に寄りつかない父、多分浮気を繰り返しているだろう父。「嫌だ」と思わなかったわけじゃない。複雑な年ごろだった私が、父の裏切りをたやすく受け流すことなんて不可能だろう。

それでも、私はなにもわからないフリをして、毎日をやり過ごしていた。すべては母の為だ。

時々、私は深夜に目を覚ますことがあった。

深夜目が覚めて、自室の扉を開ければ、いつもリビングの方の明かりが控え目に灯っているのだ。リビングへと歩を進めれば、そこには、ソファーに小さく座っている母の姿があった。

「今日子、起きてたの？」

「なんかのど渴いて、目、覚めたの」

「そう、早く寝なさいね」

「……母さんは、寝ないの？」

小さく電気だけをつけて、テレビも雑誌も見ずに、ただただ、ソファーに座っている母。

「……うん、もう少しだけ、起きてるわ」

まだ春先で夜は冷えるのか、肩にかけていたショールを掛け直しながら、「明日も早いんだから、寝なさいね」と私に微笑みかけた。

私は冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを取り出し、2階の部屋へと戻る。リビングのドアを閉める際に、もう1度母の顔を眺めた。

母はじつと、部屋の壁時計とにらめっこしながら、ソファアの上で小さく縮こまっていた。

「なんで寝ないの？」

とは聞けなかった。もしかしたら、父が帰ってくるかもしれないと思い、母はあややってじつと待っているのだろ。母の健気過ぎる行動が、心臓に痛かった。なぜ、あんなにも母に答えてくれない父に、そうまでして尽くそうとするのか、私には理解しがたい。

たまに帰ってきたときの父は、相変わらずだった。父が帰ったときだけ、母は笑顔だった。

「今日子、ゲームやるかー？」

「あー、格ゲーは嫌」

「えっ！？なして？」

「私、絶対に父さんに勝てないじゃん。格ゲーはやんない」

「……今日子ちゃん、つめたーい」

「いい年こいたオヤジがいじけないで。シューティングは？」

「おおっ！そしたら新作やるかっ！」

私たちは外で駆け回ったりすることは無くなったが、いつも2人でゲームなどをして遊ぶことは、小さい頃と変わらない日常。ハイテンションで遊びまわっていた子供のころより、格段にローテンションな高校生の私に、父は不貞腐れることも度々あった。

子供のような父は、いくつになろうとも、全力で私を可愛がってくれていたのだと思う。

そんな私たちを、母は昔と同様にほほ笑みながら見守るのだった。

母はどんなに小さな体をさらに小さくして、毎日のように深夜過ぎまで帰ってこない父を待っていても、父の携帯番号のディスプレイに、いつも見覚えのない電話番号が表示されていても、私は何も追及することはなかった。

自由に生きている父さんはいいだろうけど。

ただ、待つしかできない母さんは、幸せなのだろうか？という疑問を心に秘めて。

中編（後書き）

3か月以上放置して、申し訳ありませんでした！

空へだけではなく、ほかの小説でも全く更新していなかったというのに、覗いてくださっていた方々には、本当に感謝の言葉しか思いつきません。

これからもマイペースな更新になってしまいましたが、定期的には更新していきたいと思います。

後編

母の問いに、走馬灯の如く父の思い出がよみがえる。

私は父の子どもで幸せだったか、否か。母の真摯な瞳に、どう答えればいいのか躊躇したが、正直に伝えるのが1番だと結論づけた。

「母さん、私ね。幸せだったかはわからないの」

私のスーツに力強くしがみ付いて母の手をそつとはずそうとする。しかし、ますます母は手に力を込めてしまい、外すことはできなかった。

「でもね、父さんの子どもで良かったとは思っ

幸せだったかどうかなんて、私にもさだかじゃない。

ただ、私の頭をいつも豪快に撫でていた父の手は、確かに暖かかった。家族みんなで笑いあった時間は本当に楽しかった。何より、父は父なりに私を可愛がってくれたと思うから。

いつも自由で何物にも縛られない子供のような父を、今になって思えば、私もどこか憎み切れてはいなかったのだろう。

何ともやつかしい男に母は惚れたな、とつくづく思った。

「そっか、よかった、本当によかった」

母は私のなんと中途半端な返答を聞くと、心底ほつとした表情をして、私から手を離れたと思うと、ポツポツと涙を流しはじめた。とめどなく母に、私は焦らずにはいられなかった。あんなにも惚れぬいた父の死にも涙1つ溢さなかったのに、私の言葉でさめざめ

と泣いているのだ。

私はどうしていいのかわからなくなり、母が泣きやむまで無言で隣に座っていた。

あのね、と母は遠慮がちに私に話をふった。

「お母さんね、昔から、すごくお父さんのことが好きだった」

「……そうだろうね」

「出会ったときから、子供っぽいひとでね。でも、明るくて無邪気で、大きな声で笑うお父さんがにね、惹かれずにはいられなかったの。……お母さんの1目ぼれだったわ。付き合ったときも、結婚したときも、すごく幸せで。お父さんとの間に、今日子が生まれてもっともつと幸せになったの」

父との思い出を紡ぎながら、母は本当に幸せそうな顔でほほえむ。

「浮気をね、初めてされたのはもうずっと前で、もう思い出せないの」

来るものは拒まず、去るものは追わない。それが父のライフスタイルだったのかもしれない。母と同じように、父に母性をくすぐられた女性は多く、父はその女性たちとの逢瀬を決して止めることはなかった。

「寂しがりだったのよ」と言っつて、母は目を細めた。

「若いころはね、お母さんもこだわったのよ。愛する人のたった

1人になりたいって」

だから、浮気をされるたびに、浮気相手と別れてくれと父と大ゲンカをした。今日子には、親の勝手で親のいやなところを見せたくないかったから、お義母さんにあずかってもらってたのと、今になって当時の裏話を教えられた。

うん、なんとなく気づいてたよ。

祖母は、いつ母が父を見放すだろうかと、いつも怯えていたから。

「私が泣いて騒いだら、お父さんもその時の浮気相手とは別れてくれたの」

「……でも、父さん、止めなかったよね」

「そう、次から次に新しい浮気が発覚して。随分としたから、お父さんはそういう人なんだって気がついたの。甘えていいという相手には、誰にもでも甘えてしまう人。それがお父さんなんだって」

白髪が交じりはじめた髪をかきあげながら、空へ上る黒煙を再び見つめる。私に言っただつもりでも、想いははるか彼方へ旅立った黒煙へとむけられている。

「惚れた弱みでね、どうしてもお父さんから離れられなかった。近くにいるだけでも、十分に幸せだって思えたのよ」

すでに中年期にさしかかった母には、若いころの強さはなく、老いとともに諦めることを覚えてしまったのか。それでも、父に少しでも淡い期待をもって、母は父を待っていたのだろうか。

「お母さんは、それでよかったけど、今日子は私のわがままでまきこんでしまった」

母が、両手で顔を蔽い隠した。ああ、また母は泣いてしまう。

「私にとっては愛する人でも、今日子にとって良い父親だったとは言えないし、私だってあなたのことを一番に考えず、自分のわがままを突き通してしまった……っ!!」

母さん、いつも、私に負い目を感じての？

「……今日子、ごめっ」

「いい、母さん。その言葉は言わないで」

「今日子っ……」

「私、父さんの子で良かったし、母さんの子で良かった。それでいいじゃない」

お願いだから、その小さくなってしまった体をさらに縮こませないで。そんな母さん、見たくないよ。

「今日子、今日子。ありがとう、本当にありがとう。」

母は私に抱きついて、おいおいと泣き続ける。

母さんが、幸せだったのなら、私はそれでいいと思うから、今まででよかった分、母が泣きつきるまで、背中をさすってあげたいと思った。

空へ昇っていく黒煙をみつめる。

父さん、私は父さんの子どもで幸せだったし、不幸だったと思う。

いつも全力でわたしを可愛がってくれたし、私は父さんの大きな手が大好きだった。

いつも自分が1番で、母さんを泣かせっぱなしで、軽いところが嫌いだった。

でも、父さんと過ごした日々は楽しかったよ。

私、今までわがままなんて、あまり言ったことなかったね。最後くらい、お願い聞いてくれない？

自分の好き放題やったんだから、これからは母さんを見守ってほしい。母さんだけを見守って。

いい加減、一途になってよね？ 父さん。

後編（後書き）

ぴったり、3話に納まってよかったです。本当はもっと書きたいこともありました。が、うまくまとまらず、最終的にこういう終わり方になりました。ずっと前から書きたいと思っていたものなので、とりあえずかけて満足です。

オマケですが、父の名前は「茂彦」母の名前は「善代」でした。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8296d/>

空へ

2010年12月16日02時45分発行